

## 会議録

1. 附属機関の名称 : ヒツバタゴ保存活用計画策定委員会
2. 開催日時 : 令和5年11月6日(月) 午後2時00分から午後3時40分まで(現地)  
午後3時40分から午後5時20分まで(会議)
3. 開催場所 : ヒツバタゴ自生地(現地)、犬山市役所 2階 201 会議室(会議)
4. 出席した者の氏名
  - (1) 委員 林進、増田理子、玉木一郎、赤塚次郎、半谷美野子
  - (2) 執行機関 歴史まちづくり課 加藤課長、渡邊課長補佐、大前主事
  - (3) その他 オブザーバー 文化庁文化財第二課天然記念物部門 田中文化財調査官  
愛知県県民文化局文化部文化芸術課文化財室 山内技師  
支援業者 (株)環境アセスメントセンター 美馬、栗原、出縄、近藤
5. 現地指導

(事務局より資料2に基づき、環境調査結果概要及び保存活用計画案について説明)

委員:自生地の北側に柵はないが、北側から入ることはないのか。  
事務局:現在、北側から入るルートはない。

委員:自生地の南側の境界線はどこになるのか。  
事務局:U字溝付近が道路であり境界杭がある。

委員:ネットフェンスがない場合、イノシシによる影響が発生するか。  
事務局:フェンス自体は、侵入可能な穴もあいており、イノシシが飛び越えられる高さでもあるが、現時点でフェンス内に目立った影響は確認されていない。

委員:フェンスがないとイノシシに荒らされる可能性はある。

委員:左岸側の管理はどのようなになるのか。  
事務局:希少草本種が生育しているので、現代環境の保全を前提とする案である。

委員:右岸側の管理について、フェンス内は林床を見ながら手で刈込していて、外側は機械で刈込している。

委員:今見るとフェンス外の幼木、個体 N、K は確認できない。

## 6. 議事

### (1) 報告・協議事項

- ① 環境調査状況報告
- ② 天然記念物の本質的価値(第4章)
- ③ 本天然記念物が抱える課題(第5章)

## 7. 会議要旨

### (1) 環境調査状況報告

(事務局より資料 1-1、資料 1-2、資料 1-3 に基づき、環境調査結果について報告)

委員:哺乳類センサーカメラの結果は、里山学センターの結果とほぼ同じだと思う。特にイノシシは昼間も活動しているので、その点もまとめられたらよい。

光環境などもとりまとめたらよい。最近、草の生え方が変わってきており、その原因は地温が下がらないことである可能性もあるため、今後、地温の調査も考えている。地下水位とともに、実生更新に関係してくる可能性があるため、今後のモニタリングでは地温にも着目したらどうか。今年データは事務局と情報交換していく。

助言者:動物について、この地域でニホンジカの情報・知見はあるか。

事務局:カモシカの情報はあり、西洞の入口近くで死体が確認されたことがある。シカについては、情報を掴み切れていない可能性がある。

委員:今井では、シカの情報がある。車にぶつかったということも聞いた。

委員:カモシカの目撃情報はあり、カモシカが出てくると、シカが増えてくるという全国的な傾向がある。今後も動向を見ていったほうがよい。

事務局:哺乳類について里山学センターで集められた情報を見せていただきたい。

### (2) 天然記念物の本質的価値(第4章)の協議

(事務局より資料 2、資料 3 に基づき、天然記念物の本質的価値について提案)

委員:本質的価値についてはこれでよい。自生地を維持していくことが書かれている。

委員:本質的価値について、特に意見はない。

委員:どうしてこの西洞に自生地が存在するのか、維持されてきたのかを書く必要があるのではないか。資料 2 のドローンの写真にあるように、ヒツバタゴのある谷の日光の当たる方向などは、自生地を生み出した要因ではないか。そのような内容を本質的価値に書き加えたらどうか。

事務局:関連する要素として気象、基盤、水分などを入れているが、そこに立地という形で記載を加えたらよいか。

委員:ここの谷だけに自生地が存在する理由がわかるような解説があるとよい。本宮山山系の中で西洞

の谷は地形的に少し特異的であり、地質なども含め、どのような理由で希少種がここにあるのかなどを書くことによって、市民にも分かり易くなると思う。

事務局:第4章のp1に加筆する形でよいか。

助言者:今議論している話は、第2章に書かれる内容かと思う。第4章には指定当時に定められた基準とともに、別立てで指定以降にわかった本質的な価値について整理する形になる。歴史的なこと、広い地域の環境的要素については第2章で整理された上で、第4章では本質的価値を理解するための内容となる。

p2の図で右岸・左岸を分けているが、これはあまり意味がないかと思う。ここでは解説的な記載の仕方であり、p1の本質的価値では、指定以降にわかったこと、理解を深めるための内容をしっかり記載したほうがよい。また、本種は対馬にも分布し、東海地方特有のものではないため、記述を再考したほうがよい。

委員:本宮山山塊の地質はチャートで、花崗岩が貫入している。岐阜県を含めてヒツバタゴ自生地はすべて花崗岩地帯にあるという特徴がある。特殊な地質の上に成り立つ植生であり、他に類をみないことは、本質的価値にあたるのではないか。

それらもあわせて本質的価値の記載について、加筆をお願いしたい。

委員:地質の専門家にも意見をいただいたらよい。

### (3) 本天然記念物が抱える課題(第5章)の協議

(事務局より資料2、資料3に基づき、本天然記念物が抱える課題について提案)

委員:フェンス外の幼木の保護の方法について今後検討し、対応したほうがよい。

委員:ネットフェンスは、過去の地権者とのやりとりで設置されたものであるため、今はあまり意味がない。もう少し広げて保護していったほうがよい。

事務局:フェンスを外に、どの程度広げていくかについて、またご相談したい。

委員:基本的にヒツバタゴは重力散布なので、光環境も踏まえ、枝張りの範囲よりやや広く考えたらどうか。今の幼木は水脈に沿って生えている。

委員:本天然記念物の活用については、近傍にある入鹿池という歴史・文化・自然遺産があるため、具体的な歴史的事実も含め、これらとリンクさせていく必要がある。1868年入鹿切れのとき(西洞川の真正面に百間堤がある)、伝承では池の水が山を上り、それが下って鞍ヶ池のほうへ行き、旭日村を襲ったと言われていて、その水の高さは30mということである。ヒツバタゴの自生地がその時に残っていたとしたら、災害時に安心な場所ということになる。入鹿という土地と絡めた発信をすることにより、市民に伝わると思う。また、入鹿道という観点もあり、歴史との関係も書き添えたらどうか。

周辺施設を活用したガイドンスという課題があげられているが、このヒツバタゴと歴史文化資源も含めた犬山ミュージアム、情報発信の場をつくるなども考えてはどうか。

委員:この地域は中央構造線の内帯部分にあたる。古い地層があり、古くからの植物分布が残っている。単なるモニタリングにとどまらず、これらを新たな研究課題として設定しておいていただきたい。

事務局:第5章 p4 遺伝子上の課題について、同一地域の種であるということであれば、近傍のヒツバタゴ畑は、現状の整理として扱えばよいか。

委員:遺伝子上の課題として特筆する必要はない。また、現在は下草刈りなど適切に行われているため問題はない。

委員:自生地で実生更新した事例をここで初めて見た。他の樹種、ハナノキでも実生更新している例は見たことがない。インターバルが長いという仮説だが、ヒツバタゴは50年周期くらいで更新しているのではないか。ある時一斉に実生ができるようである。実生更新する時は、種子の成熟度が問題になるが、少し衰弱した個体の方が種子の成熟度が高くなる。現在の幼木は劣勢木からでたものであろう。この件は要検討課題である。

委員:フェンス内の管理だけでなく指定地内の自然更新を目指していくべきであり、現在のフェンスがあることの課題があれば明確にし、指定地内全体を保存管理していく方向性を示してほしい。近隣のヒツバタゴ畑の成り立ちについては、記録として残したほうがよい。

事務局:指定地内全体を保存していくことを考えていく。成り立ちについては、現在ヒツバタゴ畑を管理されている方に、経緯等について確認する。

委員:指定地内の川の反対側はどうしていくのか、ヒツバタゴとは別の希少な植物があるとのことだが、それらを守っていくことを書いておいた方がよい。

ヒツバタゴの天然更新については、もっと積極的に調査・保全していく必要がある。播種実験などをもとに毎年実生個体の有無を調査していった方がよい。

遺伝子上のリスク管理については、近傍の畑に成木に達した個体が多数存在するため、自生地との遺伝子流動があることは多分確実だと思う。限られた個体数の中で交配の相性のようなものがあるのかもしれない。自生地には両性個体が少なく、事実上の母樹は非常に少ないと考えられる。しかし近傍の畑には母樹になりうる個体が多いため、近傍の畑も自生個体の延長として考えていったほうが良いのかもしれない。

## ○その他

※次回委員会は2月を予定。詳細な日程については後日調整する。